

建築ワークショップの社会的意義に関する研究

- 版築ワークショップの活動事例を中心として -

寺西 ゆう子

キーワード：建築ワークショップ、共同作業、自然素材、版築工法、環境共生

1. 研究の背景と目的

日本の高度成長期における住宅の発達過程で、新建材の開発研究が積極的に行われ、機械化や大量生産のためのシステム化が進んだことで、ハウスメーカーなどによる商品化された住宅がさかんに普及するようになった。住宅産業が高度化する一方で、特に明治時代の都心部では近世以降、我々は自らのすまい作りに関わることはほとんどなくなり、専門家に任せ、自分の知らないところで自身のすまいが出来上がることが当たり前の時代となりつつある。また、この結果、家づくりにおける地域での共同作業なども消失しつつある。そして、最終的に自然に返らない素材を使うようになった結果、現在では使用後その多くが廃棄されている。

近年このような環境的配慮の視点から地球に優しい住宅として再び建材に自然素材を使用することが見直される傾向にあり、実際にその普及・啓発のために一般人でも参加できる建築ワークショップも徐々に広まりつつある。このような建築ワークショップは、かつては自然素材を使って自らの手で作っていた「すまい」について思い起こさせ、商品化した住宅が普及する現代社会において、我々の「すまい」のあり方をもう一度見直す機会ともなりうる。

本研究ではそうした建築ワークショップが自然環境と共生し、地域共同体の中で生きていた生活から遠ざかってしまった現代社会において、どのような意義を持ち、どのような影響を与えうるのかということ进行を明らかにする。

2. 研究の方法

自然素材を建材として使うことでいったいどのような効果があるのかについてまとめ、過去に行われた建築ワークショップについて、既往研究や実地の活動事例を基に分析・整理し、「実践型ワークショップ」という分類概念も新たに導入しながら、建築ワークショップの意義や価値について考察する。また、筆者が実際に参加した版築ワークショップでの経験を研究対象として具体的な考察を行う。

3. まとめと考察

商品として次から次へと「すまい」が生産されている現代社会において、建築ワークショップは施工過程の可視化を図ることができ、また一般人でもそのプロセスに関わることを可能にし、「すまい」としての住宅をより深く理解することができる効用がある。その関わり方は様々であるが、中でも実際に手を動かしモノを作る「実践型」の建築ワークショップは、すまいの商品化、画一化、地域共同体の消失などに象徴される、昔には当たり前に見られた人間味のある暮らしを見失っている現代社会を見直し、改善のきっかけを作る役割を果たしていると考えられる。さらに、すまいづくりに直接関わることですまいにより一層愛着がわき、すまいやすまい作りを世代から世代へ受け継いでいける、いわば持続可能社会におけるすまいやすまい作りのあり方にヒントを与えるものになりうると考えられる。

また、実践型ワークショップの中でも版築ワークショップに関しては、他の自然素材を扱った実践型ワークショップとは異なり専門技術を必要としないため素人でも取り組みやすく、一度工法のノウハウを身につければ、専門家なしで実践に移しやすいため、工夫次第で比較的容に普及できると考えられる。

経済や技術が発達し、余計な手間や時間を最小限に留めようとする現代社会においてはなかなかすまい作りに関わる機会が得られない。そのため、実践型ワークショップをきっかけに実際に自分で体験することで、すまい作りにかかる手間や時間は「余計である」という考え方から「価値がある」と思えるような風潮が現代社会に浸透すれば、さらに建築ワークショップの存在意義は大きくなり、我々が今後目指すべき持続可能社会における「すまい」や「すまい作り」のあるべき姿に一步でも近づく一助となることが期待できる。